

令和 6 年 5 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01418

研究課題名（和文）体制変革期の憲法と憲法学

研究課題名（英文）Scholars in constitutional transitions

研究代表者

石川 健治（ISHIKAWA, Kenji）

東京大学・大学院法学政治学研究科（法学部）・教授

研究者番号：40176160

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、政党政治の崩壊と天皇機関説事件、近衛新体制における革新政治と国防国家、戦時統制経済や大東亜共栄圏、終戦工作と八月革命、占領体制と憲法制定、逆コースと改憲論議などを、別々の事象として研究するのではなく、1930年頃から1960年頃までの憲法変動を総体として捉える。そして、かかる「体制変革期」における憲法および憲法学のありようを、とりわけ歴史過程における人的な連続性に着目して、包括的に研究することを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の新規性は、戦前・戦中・戦後を一連の「体制変革期」として研究する視角の斬新さに加えて、歴史研究と理論研究の有機的結合を試みた点に求められよう。歴史変動の実相は、それに関与した人間の理論枠組みを踏まえることで、はじめて明らかにされる一方（「理論」を踏まえた「歴史」研究）、個別論者の解釈・実践だけでなく、総体としての学説状況や憲法現実も、当時の政治的文脈におき直すことで、はじめてその真価を問うことができるからである（「歴史」を踏まえた「理論」研究）。実際、理論家が歴史研究の面白さにめざめ、歴史家が了解枠組みの刷新を図るなど、有意な化学反応が頻繁に発生した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on constitutional changes from 1930 to 1960 as a whole, rather than studying the following events as separate subjects: the collapse of party politics and the incident of the "theory of the Emperor as an organ of state.", the innovative politics and national defense state in the Konoe new regime, the controlled economy in wartime and the "Greater East Asia Co-prosperity Sphere", some efforts to end the war and the so-called August Revolution, the occupation system and the new constitution, the reverse course and constitutional revision, and so on. This study aims to conduct a comprehensive survey of the state of our constitutions and constitutional studies during this system change period, especially focusing on its human continuity in the historical process.

研究分野：憲法学、国法学

キーワード：憲法 憲法学 憲法学者 憲法変動 体制変革期 近衛新体制 憲法制定過程 憲法調査会

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する前提として、まず、(1)東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター原資料部が保存する諸資料(田中二郎関係文書、佐藤功関係文書、我妻栄関係文書、東京大学憲法講義関係文書等)、(2)立教大学図書館が管理する宮沢俊義文庫、(3)神奈川大学資料編纂室が大学史資料として保管する黒田覚関係文書など、既に一応管理下にはあるが、資料として十分に活用されていないケースが目立っていた。

さらに、(4)蟻屋書房(長野県伊那市高遠町西高遠190-2)の保有する遠藤源六文書、清宮四郎文書、黒田覚文書(内容的には(3)を補完すべきもの)、富田健治文書、針生誠吉文書、(5)水たま書店(東京都板橋区大山金井町3-6)の保有する黒田覚手沢本(2020年に閉店した高円寺の老舗古書肆・都丸書店)など、期せずして重要資料が次々に発掘されており、場合によっては散逸のおそれもある、という切迫した状況があった。

2. 研究の目的

本研究は、1930年頃から1960年頃までの憲法変動を総体として捉え、かかる「体制変革期」における憲法および憲法学のありようを、とりわけ歴史過程における人的な連続性に着目して、包括的に研究することを目的とした。それは、決して過去の物語としてではなく、現在もまた「体制変革期」にさしかかっている、という自覚のもとに行われた切実な研究である。

3. 研究の方法

本研究の新規性は、戦前・戦中・戦後を一連の「体制変革期」として研究する視角の斬新さに加えて、歴史研究と理論研究の有機的結合を試みた点に求められよう。歴史変動の実相は、それに関与した人間の理論枠組みを踏まえることで、はじめて明らかにされる一方(「理論」を踏まえた「歴史」研究)、個別論者の解釈・実践や、総体としての学説状況も、当時の政治的文脈におき直すことで、はじめてその真価を問うことができるからである(「歴史」を踏まえた「理論」研究)。

本研究の発足が折悪しくコロナ禍の発生と重なり、肝心の一次資料へのアクセスが著しく困難になってしまったが、研究分担者・研究協力者がそれぞれの研究拠点で、利用可能なアーカイブや研究資料について地道な研究活動を続ける一方、如上の資料の散逸を防ぐべく、必要なものについては購入して、その整理分析に努めた。その成果はオンライン研究会にて発表されたが、コロナ禍終息後は、立て続けに研究合宿を組織して挽回を図った。

4. 研究成果

(1) 宮沢俊義

「人物」研究のパートにおいて宮沢の研究を担当したのは、研究協力者の原田である。立教大学図書館宮沢俊義文書を整理活用して、歴史的視点から宮沢の憲法理論を見直した。八月革命にかかわる諸概念についての認識、国家総動員体制・高度国防国家体制へのかかわり、1928年の口述筆記『憲法大意』から1934年の『憲法講義案』への体系の変化などについての研究は、「**八月革命説の周辺 国体・国家法人説・相対主義**」など3報告に結実した。

(2) 黒田覚

黒田覚の研究を担当したのは、石川である。瀧川事件と天皇機関説事件を契機に、京都帝国大学を代表する憲法学者の地位に登りつめた黒田は、近衛新体制のイデオログとして頭角を現し、法学部長として終戦を迎えたが、京大を追われることになった。

黒田は、浪人時代の自分を鳥かごから放たれた自由な鳥(Freivogel)だと自嘲し、寓居を「自由鳥荘」と呼んだ。第9回オンライン研究会(2022年5月1日)では、そうした「黒田覚のFreivogel時代」の実相を解明し、黒田における理論と行動の並行現象や、改革派憲法学者としての思惟構造の連続性を論じた。石川健治・大村敦志・小粥太郎「新・民法学を語る(その1)石川健治先生をお招きして(上)(下)」には、その成果が生かされている。また、フライフォーゲル時代の黒田を支援したのが、憲法学者・清宮四郎であった(彼については、「始源について」、「自治を学問する」を執筆した)。清宮は、国家学講義を不遇時代の黒田に委嘱し、そのなかのひとつ1956年6月に行われた集中講義が、後の憲法学者・樋口陽一をつくった事実は重要である。この文脈で本研究の成果を活用したのが、「憲法典・間テクスト性・憲法学」であり、黒田の憲法制定権力論を戦後の通説に仕立てた芦部信喜にも、言及している。

そして、黒田と同様の浪人時代を過ごした、近衛新体制の古参兵たちが主力となって展開されたのが、戦後第一期の改憲論議であった。新設の東京都立大学で学者キャリアを再建した黒田が、同世代のライバル宮沢・清宮らが参加を断った内閣憲法調査会の専門委員に就任したのには、改革派としての一貫性が感じられる。その間に彼が遺した多くのノートから、理論派の黒田が、かねて読みさしになっていたシントラー『憲法と社会構造』に取り組みながら自らの行動を整理する一方、ほかならぬ調査会の海外視察を通じてフランス憲法学に開眼していった過程が、解明された。そうした彼を含む「古参兵」の思考を規定したのが、京都学派の哲学であり、西田幾多郎と並ぶ領袖のひとりとして戦後も活躍した田邊元的重要性については、「『世界』の起源」で明らかにした。「憲法調査会報告書(1964年)を読む(1)(2)近衛新体制の古参兵たちと戦後憲法改正論議」では、特に京都学派「四天王」のひとり高山岩男との関連において、黒田を再論した。これらを承けて、9月の仙台合宿では、「法と動態 黒田覚・田邊元・針生誠吉」と題する総括報告が行われた。

(3) 我妻栄

我妻栄の研究を主に担当したのは、小島である。小島は、戦後の憲法論の人権論の体系に影響を与えた我妻の『新憲法と基本的人権』全体を貫く対的概念として、Person/Menschに注目した。我妻の『民法講義』の関連叙述の形成過程を探るとともに、我妻栄記念館(米沢市)や我妻栄関係文書(東京大学)の原資料を使うことで、この概念を得た時点と影響された著作を特定した。さらには、『経済再建と統制立法』等の戦後改革に関する叙述がこの対概念によってどのように導かれているかも、分析していった。原資料の調査の進行に合わせて「PersonからMenschへ 我妻栄における憲法と私法」等の報告を行い、その成果を「憲法と私法 『人格』から『人間』へ」山城一真編『50年後の我妻法学』(近刊)所収論文として公刊する予定であり、その一部は雑文「新二重基準論」で紹介した。

(4) 入江俊郎

入江俊郎の研究を担当したのは、研究協力者の守田である。原資料を使った憲法学研究に関心を持つ若手研究者として参加した。守田は、入江が関与した砂川事件最高裁判決の補足意見を出発点にして、入江俊郎文書に残された書き込みを手がかりにアメリカ連邦最高裁判所のField v. Clark判決へと分析の対象を広げ、さらには、現代ではやや見えにくくなっているいくつかの文脈を発掘し、「入江俊郎とField v. Clark」ほかの中間報告にまとめた。

(5) 田中二郎

田中二郎の研究を主に担当したのは、石川及び山羽である。石川は、東京大学の田中二郎文庫（洋書）を日常的に研究する傍ら、他の科研費を利用したアメリカ訪問の機会に、コロンビア大学の田中二郎文庫（和書）を調査した。同文庫は、遠くニュージャージー州プリンストン大学フォレストルキャンパスに所在する諸大学の共同書庫で管理されており、邪険な扱いを受けているとはいわぬにせよ、必要資料を取り寄せるのに3日を要する状態にある。

山羽は、当初「警察（Polizei）」概念に焦点をあてて「主題」研究を行い、「警察」をめぐる戦前および戦後の学説を通覧して、「永遠のPolizei (1) 国家作用論における抗争概念としての」と題する報告を行い（2021年12月）、次に、戦前における警察組織の実践を嚮導した思想をめぐる研究を精査および総合することで、組織としての「警察」と国家権力の類型としての「警察」の間にみられた連関について、「永遠のPolizei (2) 組織としての警察の動態をめぐる研究動向についてのノート」と題する報告を行った（2022年11月）。ここから「人物」研究に転じて、戦後における日本の行政法学の基礎を築いた田中二郎の「警察」やこれに関連する主題（行政作用論）についての議論を検討し、「《戦時統制経済から福祉国家へ—田中二郎と三つの『体制変革』》のためのメモ」と題する報告を行った（2023年9月）。

(6) 佐藤功

佐藤功の研究を担当したのは、研究協力者の矢島である。矢島は、佐藤が、日本国憲法制定の審議に関与した元貴族院議員有志らの集まりである萍憲法研究会には参加者の一人として、憲法問題研究会には世話人の一人として関与し、憲法調査会に専門委員として参加した。この、いわば二股膏薬とも、不節操とも評されかねない事情にみずから身を置いた背景と理由を探り、「三つの憲法研究会と憲法調査会」等の報告にまとめた。

(7) 中村哲

中村哲についての研究を担当したのは、西村である。1945年の体制変革に伴い、我が国の憲法学もまた、「大日本帝国」の憲法秩序から「日本国」の憲法秩序へと、研究対象の変革を余儀なくされた。なかでも、植民地帝大に勤務していた憲法学者にとって、かかる事態は深刻に受け止められたはずで。西村は、敗戦時に台北帝国大学の憲法講座を担当していた中村哲をとりあげ、戦後の「植民地研究」とも言うべき中村による沖縄研究を追跡することを通じてアプローチを試みた。その結果、中村の沖縄研究は、彼が青年期から付き合いのあった柳田国男の『海上の道』から、大きな影響を受けていたことが明らかになった。日本人の源流を南方に見る柳田の見解に賛同し、日本と沖縄が同じ「島国の存在論理」に基づいていると主張するに至ったのである。こうした研究成果は「岸信介と中村哲 満州と台湾の間」、「海の憲法学 中村哲と柳田国男」にまとめられた。そして、それが「海上の道」を通して台湾へと渡った戦前の経験と、どのような関係にあったのかを検討し、以て国民国家を前提とする戦後憲法学とは異なる中村憲法学の可能性を考えることが、今後の課題になる。

(8) 針生誠吉

針生誠吉については、石川が担当した。戦後憲法学を代表する学会である全国憲法研究会で初代事務局責任者として活躍した針生誠吉の遺した文書には、「全国憲」草創期における往復八ガキの返信が多数含まれており、貴重な資料になっている。また、劣化の著しいスライド資料については、専門業者に依頼して復元を試みた。これらの成果は、初の対面実施となった第13回研究会の編集会議で披露されるとともに、仙台合宿で「法と動態 黒田覚・田邊元・針

生誠吉」と題して報告された。

(9) 芦部信喜

戦後日本を代表する憲法学者といってよい芦部信喜については、生誕百周年を迎えて出身地の長野県駒ヶ根市で顕彰の動きがあり、これを契機として、ご遺族から出身校の旧制伊那中学（現・伊那北高校）の同窓会に、芦部の遺した研究ノート類が数次にわたって寄贈されることになった。これについては、石川が先遣隊として調査を行い、後に研究協力者の守田もこれに加わったのであったが、研究分担者・協力者の総意によって、現地で研究合宿を敢行する運びとなり、早朝から深夜まで一心不乱に資料を読んだ（2024年2月、伊那北高校同窓会館）。到着して早々、テーブルに並べられた資料を前に、参加者全員がみるみる集中してゆくのがわかり、念のため石川が用意していた「芦部信喜研究入門」と題するガイダンス報告を、行うタイミングもみつけれないほどであった。のみならず、そうした我々の研究姿勢が同窓会やご遺族の信頼をかちえた結果、中野白鷺のご自宅での調査をお許しいただき、2024年3月末日、研究活動は新たなステージを迎えることになった。本科研の範囲でも既に画期的な発見が相次いでいるが、それを超えて新たな研究体制を構築する必要性を、我々は痛感している。

(10) 「主題」研究

【財政】宍戸は、日本国憲法の統治構造が君主主権から国民主権へと移行する中で、民主政治の他律的な拘束を避ける憲法の規律密度の低さがもった積極的な意味と、それが逆に、いわゆる憲法附属法によって選択された特定の制度形態があたかも憲法典の命じた絶対的なものとされて（それには明治憲法下の理解が無意識的に引きずられる場合も多い）、その前提で運用が蓄積されるプロセスを、日本国憲法の財政条項を素材として研究した（長谷部恭男編著『注釈日本国憲法(4)』における第8章財政前註及び第83～86条の注釈という形で公表予定）。成果の一部は「『議会の支出統制権・再考』へのコメント」で公表済みである。なお、そのような問題意識を日本国憲法の統治構造全体に応用しながら議論したのもとして「『日本国憲法のアイデンティティ』というテーマ設定は妥当だったのか？ - 連載の総括として」がある。

【地方自治】【政党】宍戸は、地方自治制度についても同様のことを、全国都道府県議長会の招待講演として示したのが「地方議会の位置付け等を明文化する地方自治法改正の意義とデジタル化が進む中での議会のあり方」である。同様に憲法が明文で規律しなかった政党のあり方や、そうした政党のあり方が統治構造のあり方を規定するダイナミズムについては、宍戸が「政党制から考える日本国憲法」で論じた。現下の政党ガバナンスをめぐる議論にも通じる。

【学問と教育】西村は、戦前日本における教育と学問の分離について研究報告を行い、論文「戦時下における学問の自由」をまとめた。

【司法権】岡野は、論文「手続の公開」を執筆し、その構想を発展させる形で、「司法権論からみた、体制変革と『改革』」と題して研究報告を行い、特に1990年代以降の「改革」をどう位置づけるかを設問として設定することで、「体制変革」というコンセプトの明確化を試みた。なお、岡野は、沖縄という視点を掛け合わせて、米軍統治下の沖縄の司法という新たな研究課題に着手した（「米軍統治下沖縄の司法 『戦後憲法』学との接点を探って」、「沖縄・日米安保・米軍連邦最高裁（仮題）」）。

本科研の研究成果を社会に還元するとともに、今回新たに発見されたテーマを軸に新しい研究体制の構築を視野に入れた、公開シンポジウムを2024年度中に実施する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計37件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 穴戸常寿・石川健治・清水真人・毛利 透	4. 巻 36号
2. 論文標題 憲法学の75年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論究ジュリスト	6. 最初と最後の頁 4-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 -
2. 論文標題 黒田覚 村正の切れ味・改革派憲法学者	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校法人神奈川大学『神奈川大学人物誌』神奈川大学編	6. 最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 知更、石川健治、大村敦志、高田篤	4. 巻 38号
2. 論文標題 憲法学と「社会」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論究ジュリスト	6. 最初と最後の頁 4-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 50巻3号
2. 論文標題 例外のないルールはない、が。	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 -
2. 論文標題 解説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鶴飼信成『憲法』（岩波文庫）	6. 最初と最後の頁 389-484
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 95巻3号
2. 論文標題 憲法典・間テキスト性・憲法学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 92-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治、大村敦志、小粥 太郎	4. 巻 685号
2. 論文標題 新・民法学を語る（その1）石川健治先生をお招きして(上)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 書齋の窓	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治、大村敦志、小粥太郎	4. 巻 686号
2. 論文標題 新・民法学を語る（その1）石川健治先生をお招きして(下)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 書齋の窓	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 688号
2. 論文標題 書評・高山裕二『憲法からよむ政治思想史』 古典古代から二〇世紀までの西洋政治思想史を描き切った野心的な試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 書齋の窓	6. 最初と最後の頁 52-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 -
2. 論文標題 軍事同盟と憲法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 平和学事典 (丸善出版)	6. 最初と最後の頁 244-247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 1192
2. 論文標題 身体・関係・憲法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 136-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 972号
2. 論文標題 始源について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 80-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 978号
2. 論文標題 「世界」の起源	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川健治	4. 巻 100巻2号
2. 論文標題 自治を学問する	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 自治研究	6. 最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 穴戸常寿	4. 巻 7
2. 論文標題 裁判を受ける権利の現在と未来	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 憲法研究 (信山社)	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 穴戸常寿 違憲審査制と統治行為論2020 山本龍彦・横大道聡編『憲法学の現在地 判例・学説から探究する現代的論点』(日本評論社) 日本評論社389-401	4. 巻 -
2. 論文標題 違憲審査制と統治行為論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山本龍彦・横大道聡編『憲法学の現在地 判例・学説から探究する現代的論点』(日本評論社)	6. 最初と最後の頁 389-401
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大河内 美紀,水島 治郎,赤坂 幸一,宍戸 常寿,西村 裕一,林 知更,山本 龍彦	4. 巻 36
2. 論文標題 日本国憲法のアイデンティティ (NUMBER 10)憲政のアクターとその盛衰 : 政治学との対話 座談会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論究ジュリスト	6. 最初と最後の頁 194-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 知更,尾崎 一郎,赤坂 幸一,大河内 美紀,宍戸 常寿,西村 裕一,山本 龍彦	4. 巻 37
2. 論文標題 日本国憲法のアイデンティティ (NUMBER:11)憲法の危機と日本社会 : 法社会学との対話 座談会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論究ジュリスト	6. 最初と最後の頁 152-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宍戸常寿	4. 巻 95巻6号
2. 論文標題 「議会の支出統制権・再考」へのコメント	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 48-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宍戸常寿	4. 巻 -
2. 論文標題 政党制から考える日本国憲法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 赤坂幸一ほか編著『日本国憲法のアイデンティティ』(有斐閣)	6. 最初と最後の頁 168-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤坂幸一・大河内美紀・宍戸常寿・西村裕一・林知更・山本龍彦	4. 巻 -
2. 論文標題 「日本国憲法のアイデンティティ」というテーマ設定は妥当だったのか? - 連載の総括として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 赤坂幸一ほか編著『日本国憲法のアイデンティティ』（有斐閣）	6. 最初と最後の頁 427-461
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島慎司	4. 巻 65巻4号
2. 論文標題 規律法の誕生	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上智法学論集（矢島基美教授退職記念号）	6. 最初と最後の頁 281-299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小島慎司	4. 巻 524号
2. 論文標題 新二重基準論	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 法学教室	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 36巻
2. 論文標題 近代日本と「個人の尊重」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論究ジュリスト	6. 最初と最後の頁 45-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 66巻6号
2. 論文標題 戦時下における学問の自由	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法学セミナー	6. 最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 -
2. 論文標題 上杉慎吉と美濃部達吉	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本思想史事典編集委員会編『日本思想史事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 622～623
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 -
2. 論文標題 自主憲法制定の希求と「逆コース」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駒村圭吾 = 吉見俊哉編『戦後日本憲政史講義 もうひとつの戦後史』法律文化社	6. 最初と最後の頁 69～90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 -
2. 論文標題 天皇制	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山本龍彦 = 横大道聡編『憲法学の現在地 判例・学説から探究する現代的論点』日本評論社	6. 最初と最後の頁 46～61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小熊英二・山本龍彦・赤坂幸一・大河内美紀・宍戸常寿・林知更・西村裕一	4. 巻 34
2. 論文標題 憲法の『余白』と社会 歴史社会学との対話	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論究ジュリスト(有斐閣)	6. 最初と最後の頁 138-150
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 -
2. 論文標題 近代日本憲法思想史序説 「内なる天皇制」の観点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 赤坂幸一ほか編著『日本国憲法のアイデンティティ』(有斐閣)	6. 最初と最後の頁 74-95
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村裕一	4. 巻 5号
2. 論文標題 日本人の憲法意識 近代日本に憲法はあるか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 エトランデュテ	6. 最初と最後の頁 257-290
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡野誠樹	4. 巻 134巻3・4号
2. 論文標題 憲法-訴訟-法 : 違憲審査と訴訟構造の交錯(6・完)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国家学会雑誌	6. 最初と最後の頁 249-316
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡野誠樹	4. 巻 95巻11号
2. 論文標題 手続の公開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山羽祥貴	4. 巻 93巻5号
2. 論文標題 「密」への権利(上)コロナ禍の政治的言説状況に関する若干の問題提起	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山羽祥貴	4. 巻 93巻7号
2. 論文標題 「密」への権利(下)コロナ禍の政治的言説状況に関する若干の問題提起	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 60-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山羽祥貴	4. 巻 62巻1号
2. 論文標題 抗争の場としてのassociation : 「分離すれども平等」が主題化していたものについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法学会雑誌 (木村光江教授 退職記念論文集)	6. 最初と最後の頁 409-446
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山羽祥貴	4. 巻 95巻10号
2. 論文標題 <地域>をめぐる統治と抵抗 福祉国家以後における「社会的なもの」の帰趨	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石川健治
2. 発表標題 憲法調査会報告書（1964年）を読む 近衛新体制の古参兵たちと戦後憲法改正論議（1）」
3. 学会等名 朝日カルチャーセンター横浜教室・憲法集中セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川健治
2. 発表標題 憲法調査会報告書（1964年）を読む 近衛新体制の古参兵たちと戦後憲法改正論議（2）」
3. 学会等名 朝日カルチャーセンター横浜教室・憲法集中セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 穴戸常寿
2. 発表標題 地方議会の位置付け等を明文化する地方自治法改正の意義とデジタル化が進む中での議会のあり方
3. 学会等名 全国都道府県議会議長会創立100周年記念講演（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 集英社新書編集部編石川健治ほか共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 397
3. 書名 「自由」の危機：息苦しさの正体	

1. 著者名 姜尚中・成田龍一ほか編石川健治ほか共著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 968
3. 書名 アジア人物史第9巻 激動の国家建設	

1. 著者名 穴戸常寿	4. 発行年 2021年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 424
3. 書名 憲法裁判権の動態	

1. 著者名 鈴木 敦、出口 雄一、赤坂 幸一、荒邦 啓介、江藤 祥平、西村 裕一、廣田 直美、守谷 賢輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 「戦後憲法学」の群像	

1. 著者名 宍戸常寿、林 知更、小島慎司、西村裕一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 324
3. 書名 戦後憲法学の70年を語る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小島 慎司 (Kojima Shinji) (00468597)	東京大学・大学院法学政治学研究科(法学部)・教授 (12601)	
研究分担者	宍戸 常寿 (Shishido Joji) (20292815)	東京大学・大学院法学政治学研究科(法学部)・教授 (12601)	
研究分担者	岡野 誠樹 (Okano Nobuki) (50756608)	立教大学・法学部・准教授 (32686)	
研究分担者	西村 裕一 (Nishimura Yuichi) (60376390)	北海道大学・法学研究科・教授 (10101)	
研究分担者	山羽 祥貴 (Yamaba Yoshiki) (80844787)	東京都立大学・法学政治学研究科・准教授 (22604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高見 勝利 (Takami Katsutoshi)		
研究協力者	五百旗頭 薫 (Iokibe Kaoru)		
研究協力者	矢島 基美 (Yajima Motomi)		
研究協力者	原田 一明 (Harada Kazuaki)		
研究協力者	守田 大悟 (Morita Daigo)		
研究協力者	樋口 陽一 (Higuchi Yoichi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------